書 評・紹 介

Karl E. Taeuber, Larry L. Bumpass, James A. Sweet, *Social Demography*
New York : Academic Press. 1978. pp. 336

1978年は多くの人口に関する研究が出版された豊饒の年であるが，この *Social Demography* という書物も1978年に出版されている．

Social Demography という題の著書が刊行されたのは，これが始めてでなく，1970年に Thomas R. Ford と Gordon F. de Jong が同名の書物を Prentice-Hall から出版している．Ford と de Jong の本は，しかし，Social Demography 社会人口学に関する過去の主要な労作を人口学の予備読本といった形でまとめたのに対し，Taeuber 等の Social Demography は1975年にウイスコンシン大学で開かれた社会人口学に関する会議に提出された主要論文を編集し，出版したところが異なっている．その意味では，この Taeuber 等の編著の方が同時代的な社会人口学に関する諸研究をまとめたという意義がある．

編者の一人 Karl E. Taeuber は日本で有名な故 Irene B. Taeuber の次男であり，ウイスコンシン大学の教授である．他の二人も社会学出身の人口学者でやはりウイスコンシン大学に籍を置く．

全体を通じてまず気付くことは，ほかの大学例えばプリンストン大学やペンシルバニア大学で行なわれる人口セミナーとは性格が異なり，扱われたトピックスはいずれも米国の社会人口学の最近の発展についてであり，使われた統計資料もほとんどが米国の人口・社会統計であるのが特徴的である．ほかの大学のセミナーでよく行なわれる米国以外の社会人口学的研究，例えば発展途上国における出生力の低下等の問題についての展望がここで扱われていないのは，現在の米国人口学界ではむしろ珍しい．会の性格が始めからそのように決っていたためか，国連に3年間課長として勤め，広い国際性と透徹した学才で有名な Samuel Preston の「今後15年間の人口学の将来」と題した論文においても，ほとんど米国の人口学の発達と将来だけを論じている．もちろん人口にたずさわる世界の研究者の半分は米国に集中している現在，極言すれば米国の人口学の将来はほとんど世界のそれと同意語ではあろうが．

Social Demography 社会人口学という用語は，もちろん Economic Demography 経済人口学とか，形式人口学に対する言葉で，故 David Glass あたりが提唱した分野であるが，とくに社会学から発展した米国の人口学の平均的性格を代表している．本書は出生力の分析，空間的人口分布，社会モビリテイ．そして将来問題となっている研究課題について報告論文を分類しているが，空間的人口分布と社会モビリテイについては，普通形式人口学では扱わない社会生態学的あるいは社会学的研究の成果を発表している．

個々の論文については紙面の制約上細かく論評できないが，Norman Ryder の出生力研究の問題点に関する論文における出産力データの位置付けは，この著者ならではの深い洞察に基づくものと思うし，Rindfuss と Sweet の米国出生力格差の研究はクロスセクショナル過ぎる嫌いはあるが，現在の米国の複雑な出生率の動向を理解するために有用である．又 Winsborough の出生コウホートのライフ・サイクル分析は力作であり，このような研究を日本でも是非行なってもらいたいと思わせるものである．Preston の論文は米国人口学における潮流を理解するに便利である．

もう一つ欲を言えば，出生力の社会学をもう少し押し進めてもらいたかったと思うし，結婚・離婚の問題もぜひ取り上げてもらいたかったと思うが，これはこの種のセミナーには無理だったかも知れない．出版社の Academic Press は今や米国の人口研究の大半を出版する専門社である．

（河野稠果）